

人種と混血

「父はハワイ人と中国人のハーフ、母はハワイ人とポルトガル人のハーフ。だから、僕は、半分がハワイ人の血で、あとは中国人とポルトガル人ということになる。」ハワイにいれば耳にしそうな自己紹介だ。実際は、混血化はもっと複雑に進んでいて、厳密に数え出したら切りがないというか、細かいところまで分からない（というか気にしない）ことも多い。「おばあちゃんが亡くなる間際に私にだけ私たちにはスペイン人の祖先もいると言ったんだけど、初めて聞くことだったのでびっくりしたの。後で家族のみんなに確かめたんだけど、みんな初耳だって言うのよね。で、結局、私にはスペイン人の血が流れているのかしら？」とハワイ人教会の信徒は笑いながら私に話してくれた。

このような血筋についての話題は、赤の他人に開けっぴろげに話す類いものではないし、単刀直入に尋ねて良いものでもない。「夫には日本人の血も流れているのよ。えっ、知らなかったの？あなた、彼にそのことは話してなかったの？」という妻の問いかけに、「聞かれなかったんだから、仕方がないじゃないか」とでも言いたげに首をすくめてみせたのは、それまで私がつきりドイツ人とのハーフだと思っていたハワイ人牧師だ。

自分の中に何種類の「血」が流れているかという語りは、混血化の進んだ社会では珍しいことではない。ハワイでも確かに「血」はカウントされる。この一見他愛のない「何分の一は〇〇人」といった混血についての語りは、“one-drop rule”や「血統量定 (blood quantum)」といった植民地主義的言説や現在の「人種」言説と密接に関わり合っている。この分数的血統の論理とも呼ぶべき語りにおいては、自分の中に何種類の人種の血が流れているのかというように、数世代前の祖先が現在の個人に収斂する形でアイデンティティが捉えられる。

先住ハワイ人の系譜学

一方、先住ハワイ人のアイデンティティは、現在の自分を過去の祖先に引き寄せて同定する、祖先を中心に据えた枠組みの中で構築される。これは、クラン（氏族）やリニージと呼ばれる親族集団に特徴的なものである。祖先の中の一人に自分のルーツを求めて自らが何者であるかを語るアイデンティティの構造は、同世代の仲間の中で同じ祖先を共有するという認識を生む点で、集団主義的であると言って良い。「血統量定」の言説が、祖先を現在の自分に引きつけて自らを同定する分数的血統の論理に支えられ、ややもすれば個人主義的、排他的にアイデンティティを形成するのは対照的だ。

ハワイ人のアイデンティティにとって決定的に重要となる祖先と子孫の系譜関係は、単なる出自の物語ではない。彼らが自らの出自を語る時、「私の母方の祖先は、代々ハワイ島コハラ地方の首長に仕える小首長でした」というように、そこには常に土地の記憶が介在する。ネイティブの系譜学（ジェネオロジー）において、土地と血と人（そして神）は互いに深く関わり合っている。自分達の物語を語ること、自分達が何者であるかについて語ることは、祖先への系譜を辿ることとほぼ同義であり、それは土地を介して共有される集団的な記憶を呼び起こすことでもある。

系譜学を核として構築されるのが、本来的な先住ハワイ人のアイデンティティである。それは「血統量定」によって定義づけられるような人種化されたハワイ人アイデンティティとは、おそらく相容れないものだろう。先住民としてのハワイ人のアイデンティティについては、まだ検討を加えねばならないことがあるが、紙幅が足りない。機会があれば、改めて考えてみたいと思う。

ハワイ人とキリスト教の現在

キリスト教は19世紀の前半に急速にハワイに広まり、ハワイ人社会の隅々にまで浸透した。現在もキリスト教を信仰するハワイ人は多いが、ハワイの伝統的な宗教に回帰する者もいれば、他の宗教を信仰したり、特定の信仰を持たない者もいる。米国社会におけるキリスト教の世俗化という観点から見れば、ハワイ人も例外ではなく、彼らの信仰は多様化している。

ハワイ人は、過去において、圧倒的な西洋文明と共に入ってきたキリスト教を受け入れ、自らのものとしてきた。それは、意識的であろうとなかろうと、自分達の文化やハワイ人であることを部分的に放棄して、キリスト教を受け入れる作業であったと言える。ところが、文化復興運動や主権回復運動を通して、ハワイ人とは誰か、ハワイ人らしさとは何かといった、いわゆるハワイ人の文化アイデンティティの問題が彼らの中で意識化され、前面に出てくるようになると、ハワイ人とキリスト教の関係は以前とは全く異なる様相を呈するようになった。

「宣教師がやって来た時、彼らは聖書しか持っておらず、我々の祖先は土地を持っていた。今、聖書を手にしているのは我々で、土地を手にしているのは彼らだ<sup>(1)</sup>。」ハワイ人に限らず、キリスト教の“洗礼”を受けた先住民の間で、しばしば皮肉まじりにささやかれるキリスト教批判である。実際に土地を手に入れたのは宣教師よりも彼らの子孫であることが多いので、この批判は史実を単純化していると言える。だが、このような批判に対してキリスト教徒の先住民の多くは心穏やかではないだろう。ハワイの場合、土地の問題に加えて王朝転覆に関しても宣教師の責任を問う批判がなされるのでなおさらである。

先住民がかつての植民地支配を批判するポストコロニアルの文脈において、キリスト教はしばしば批判の矢面に立つ。だから、ハワイ人の文化や主権の回復が声高に主張される状況は、キリスト教を信仰するハワイ人にとってそれほど居心地の良いものではない。このような状況では、彼らの多くは、「ハワイ人であること」と「キリスト教徒であること」の間で、自らのアイデンティティを確認しなければならない。これは、19世紀に彼らの祖先がキリスト教を受け入れた時、問われることのなかった問題である。

本連載の目的は、ハワイ人とキリスト教の関係について考え、さらに両者の関係を通して文化と信仰の問題について考えることにあった。ここで取りあえずハワイ人についての話に区切りをつけ、次にキリスト教についての話を始めたい。

[註]

(1) Derolia, Vine Jr. (1988) Missionaries and the Religious Vacuum. In Custer Died for Your Sins: An Indian Manifesto. pp.101-24 Norman: University of Oklahoma Press.